

# 『Film Analysis 映画分析入門』

第9回(6/13) 相田恭兵

## ● 第12章 ジェンダー批評

映画＝大量の社会制度が前提

20世紀という映画時代の中でジェンダーは劇的に変化→批評の対象に

映画におけるジェンダー

映画内で描かれる女性

→社会における女性の従属的な地位を固定化あるいは強化するものである

例)「分をわきまえる」女性を立派に

独立心旺盛で個人的な強さを持つ女性を悪役に

→男は男らしく(強く独立的)、女は女らしく(弱く従属的)、男っぽい女は悪者で、女っぽい男は劣った存在である、でなければならないという「主張」

ジェンダー：文化的理念によって形成され、しばしば生物学的な現実と衝突

「関係」や「差異」をあたかも自立的なカテゴリーに押し込み、それが自然なプロセスであるかのように思わせる

↓

「ジェンダー化」＝「コピーのコピー」

男らしさ・・・「達成するべきもの」

→母親との分離が不可欠

『ミルドレッド・ピアース』	1945	マイケル・カーティス	アメリカ	英語
---------------	------	------------	------	----

※第二次世界大戦期：

徴兵された「男」と、時刻に残り、「男」となって工場で働く「女」の衝突

・殺人の追求の奥に隠された、「彼女の犯した過ち」＝離婚の追及

→終戦後の女性たちに、「家庭に帰り、伝統的な女性の役割に戻るように」説得する映画

ミルドレッドの環境：

楽しげな家庭生活と彼女の不満

ヴェーダについての対立：ミルドレッドとバート

① 母親的な「甘やかし」と父親的な「訓育」

→母親的な「甘やかし」が破壊的な影響をもたらす

② ミルドレッド、ヴェーダの持つ「物質的欲望」と、バートの持つ「美德」

→人間の美德は物質的なものではないと映画は主張

ヴェーダという存在：

貧困から逃れて階級上昇を望む女性→「怪物」として描かれる

女性を家庭に戻したいと考える米国の思惑

・ジョン・クロフォードの衣装：

肩幅の広い衣装→男性的

・アイダとミルドレッドの関係：

男勝りなアイダとの関係…ミルドレッドが男に失望した時に最も強まる

→「父親中心」の考え方からしたら危険

・「戸口」や「窓」

男性と女性の領域の明確化、また、女性を闇に置く男性中心の考え方の表出

ファイト・クラブ	1999年	デヴィッド・フィンチャー	アメリカ	英語
----------	-------	--------------	------	----

・暴力を伴う肉体的交流

→母親からの分離に伴う空虚さの補填

→男性のジェンダー・アイデンティティの空虚さの隠蔽

疑問点

・レズビアンのかぶり、最初のシークエンス

・ジェンダー批評と心理学的批評の共通項、相違点